茨木市立　東奈良小学校　茨木っ子グローイングアップ計画

平成３０年１０月作成

1　３年間の計画

	目標	平成29年度(2017年度)	平成30年度(2018年度)	平成31年度(2019年度)
中学校ブロック保幼小中連携	ルールを守り、友達と協力し、努力を惜しまない子どもを育てる。	○連携会議の開催 ○中学校ブロック合同授業研 （12／6 中学校ブロック連携の日） ★ブロック内の保幼小中の研究授業に積極的に参加する。 ○連携教員による取組み ★出前授業 ○天中ブロックスタンダードの検討	○Ｈ２９の取組みの継続 ○中学校ブロック合同授業研の開催 ○連携カリキュラムの再確認 ○連携教員による取組み ★出前授業 ★英語授業の引継ぎ ○天中ブロックスタンダードの作成準備	○Ｈ３０の取組みの継続 ○中学校ブロック合同授業研の開催 ○連携カリキュラムの再確認 ○連携教員による取組み ★出前授業 ★外国語授業づくり研究会の開催 ○天中ブロックスタンダードの実施
確かな学力の育成	一人ひとりの学びを保証し、よく考え努力する子どもの育成をめざす。	○「書く力の育成を中心にして、自分の思いを表現し、伝え合う力を高める」というテーマのもとに国語を中心に学力保障部で体制をつくり研究を進める。 ○上記テーマのもと国語授業研を 3 回実施し、教職員の研鑽を図る。 ○東奈良小の共通実践の充実 ○児童の学習意欲の調査・把握 ○児童の学習定着の調査・把握 ○個に応じた指導（分割・習熟度など児童の実態を踏まえ、内容を検討）	○前年度までの成果を検証し、平成３１年度までを見通した研究テーマを設定する。 ○テーマに沿った授業研を実施し、年間を通した研修を充実させる。 ○東奈良小の共通実践の充実 ・積み上がった実践を集約し、次年度以降も活用できる形を残す。 ○児童の学習意欲の調査・把握 ○児童の学習定着の調査・把握 ○個に応じた指導（分割・習熟度など児童の実態を踏まえ、内容を検討）	○前年度のテーマを踏襲し、深めることができよう研究計画を立てる。 ○テーマに沿った授業研の実施。前年度からの系統性のある研修を実施。 ○東奈良小の共通実践の充実 ・積み上がった実践を集約し、次年度以降も活用できる形を残す。 ○児童の学習意欲の調査・把握 ○児童の学習定着の調査・把握 ○個に応じた指導（分割・習熟度など児童の実態を踏まえ、内容を検討）
豊かな人間性を育む	一人ひとりを大切にし、ともに学びともに支えあえる集団の育成をめざす。	○じぶんらしさを大切にするとともに他者への共感を持って仲間とつながる子どもの育成に努める。 ○多様な文化を受容し、平和を追求する子どもの育成に努める。 ○食育に関する取組みをすすめる。	○一人一人を大切にし、自立した集団作りを目指した取組みを追求する。 ○国際理解教育・平和学習の取組みをすすめる。 ○食育に関する取組みをすすめる。	○一人一人を大切にし、自立した集団作りを目指した取組みを追求しながら、実践する。 ○国際理解教育・平和学習の取組みをすすめる。 ○食育に関する取組みをすすめる。
健康・体力の増進	自ら行動・表現でき、健やかな体を育むことができる子どもの育成をめざす。	○体力テストの傾向を分析し、重点指導項目をつかむ。 ○茨木っ子運動Ⅱの活用 ○体育科学習カリキュラムの充実 ○児童の意欲が高まる体育科授業改善に向けた研修の実施。 ○前年度までの取組みを継続し、児童の実態に合わせて改善を行う。 ○教材・教具の充実を図る。	○体力テストの傾向を分析し、昨年度と比較する。 ○茨木っ子運動Ⅱの活用 ○体育科学習カリキュラムの充実 ○児童の意欲が高まる体育科授業改善に向けた研修の実施。 ○前年度までの取組みを継続し、児童の実態に合わせて改善を行う。 ○教材・教具の充実を続ける。	○体力テストの傾向を分析し、経年比較と３年間の総括を行う。 ○茨木っ子運動Ⅱの活用 ○体育科学習カリキュラムの充実 ○児童の意欲が高まる体育科授業改善に向けた研修の実施。 ○これまで実施した取組みをまとめ、検証し、実施一覧を作成する。 ○教材・教具の充実を継続する。
支　援　教　育　の　充　実				

2 今年度の結果と取組みについて

（1）全国学力・学習状況調査

○●国語●○

国語A
（領域ごと）
①話すこと・聞くこと
概ね良好な結果であった

②書くこと
良好な結果であった

③読むこと
概ね良好な結果であった

④言語事項
概ね良好な結果であった

（問題形式）
①選択式
概ね良好な結果であった

②短答式
やや課題が残る結果であった

③記述式
なし

（無解答率）
概ね良好な結果であった

（その他）
・もっとも正答率の高かった設問
6　慣用句の意味と使い方として適切なものを選択する『心を打たれる』
・もっとも正答率の低かった設問
5　文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書き直す
・もっとも無解答率の高かった設問
8オ　文の中で漢字を使う『せっ極的』

国語B
（領域ごと）
①話すこと・聞くこと
概ね良好な結果であった

②書くこと
概ね良好な結果であった

③読むこと
概ね良好な結果であった

④言語事項
なし

（問題形式）
①選択式
概ね良好な結果であった

②短答式
なし

③記述式
概ね良好な結果であった

（無解答率）
概ね良好な結果であった

（その他）
・もっとも正答率の高かった設問
1一　話合いの参加者として、質問の意図を捉える
・もっとも正答率の低かった設問
2二　目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書く
・もっとも無解答率の高かった設問
3二　目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読む
・もっとも無解答率の低かった設問
1二　計画的に話し合うために、市秋の役割について捉える

分析

漢字の習得には一定の成果があった。毎日の漢字書き取り、確認テストの実施と定着するまでの繰り返し学習が効果的であったと考える。しかし「せっ極的」という漢字を書く問題は無解答率が高かった。同音異義語のように漢字のもつ意味を考えて使う習慣が身についていないようである。各教科や日常生活で使用する文の中で適切に使う機会を取り入れ、日頃から親しませていきたい。さらに最後の問題のためか、時間が足りず解答できなかったことも考えられる。

また、主語と述語の関係などに注意して文を正しく書く問題の正答率が低かった。文章を書く機会は増えたものの、主語と述語を意識して文章が書かれていないことがうかがわれる。

慣用句の意味と使い方に関する問題は解答が選択式で正答率が高かったが、ふさわしい言葉を用いて決められた字数内で内容の中心を明確にして書く問題は正答率が低かった。さらに、目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にする問題は無解答率が非常に高かった。内容をまとめて書くなど自分の考えを明確に，かつ的確に記述する経験の不足が見られる。多様な文や長文、言葉に触れ、その内容を理解する経験の積み重ねの上に、要旨をまとめて書いたり、工夫や理由をまとめて書く力を培いたい。読書活動の充実や、書く事を取り入れた授業づくりなどで読み書きへの抵抗感を減らしていく必要もある。

○●算数●○

算数A

（領域ごと）

① 数と計算

概ね良好な結果であった

②量と測定

概ね良好な結果であった

② 図形

概ね良好な結果であった

③ 数量関係

概ね良好な結果であった

（問題形式）

①選択式

概ね良好な結果であった

②短答式

概ね良好な結果であった

③記述式

なし

（無解答率）

概ね良好な結果であった

（その他）

・もっとも正答率の高かった設問

5（1） 180° の角の大きさを理解し、角㋒の角の大きさが、何度であるか選ぶ

・もっとも正答率の低かった設問

7（1） 円周率を求める式として正しいものを選ぶ

・もっとも無解答率の高かった設問

6 空間の中にあるものの位置を正しく書く

9 折れ線グラフから変化の特徴を読み取り、示された事柄が両方あてはまるグラフを選ぶ

算数B

（領域ごと）

①数と計算

概ね良好な結果であった

②量と測定

概ね良好な結果であった

③図形

概ね良好な結果であった

④数量関係

概ね良好な結果であった

（問題形式）

①選択式

概ね良好な結果であった

②短答式

概ね良好な結果であった

③記述式

概ね良好な結果であった

（無解答率）

概ね良好な結果であった

（その他）

・もっとも正答率の高かった設問

1（1） 合同な三角形で敷き詰められた模様の中から見いだすことができる図形として、正しいものを選ぶ

5（2） 4色を順に繰り返しつなげ、輪かざり1本を作ったときの、30個目の折り紙の和の色を選ぶ

・もっとも正答率の低かった設問

3（1） メモ1とメモ2は、それぞれ、グラフについてどのようなことに着目して書かれているのかを書く

・もっとも無解答率の高かった設問

5（1） 横の長さが7mの黒板に輪かざりをつけるために必要な折り紙の枚数が、100枚あれば足りるわけを書く

・もっとも無解答率の低かった設問

1（1） 合同な三角形で敷き詰められた模様の中から見いだすことができる図形として、正しいものを選ぶ

分析

計算問題は概ね良好な結果であったが、小数の除法の意味について理解する問題では正答率があまり高くなかった。練習問題を通し基礎の定着を図りながら、示された式等の意味理解にも努める必要があると思われる。

円周率を求める正しい式を選ぶ問題は正答率が高くなかった。円周率の意味について理解できていないようである。実生活ではあまり活用する機会がない内容ではあるが、授業の展開を工夫していくことも考えなければならないと思われる。

算数A・Bともにグラフに関する問題には課題があった。グラフから変化の特徴を読み取り、問われていることと関連づけて考えることが苦手なように思われる。様々な場面でグラフに表されている内容を読み取る力を養う必要がある。

問題番号５のように問題形式が選択式であれば、正答率は高くなるが、理由を示された数量を関連付け根拠を明確にして記述式で解答する問題になると苦手意識が強く、無解答率ももっとも高かった。頭ではイメージできていることも、言葉にして述べることは繰り返し練習が必要になる。同じように、合同な正三角形で敷き詰められた模様の中に、条件に合う模様を見いだす選択式で解答する問題は無解答もなく、正答率も高いが、図形の構成要素や性質を基に、集まった角の大きさの和が３６０°になっていることを言葉で表現する問題は無解答率が高かった。数学的な考え方を表現するにあたり、文字にして書くという経験を多く積むことができるよう今後も配慮していきたい。

○●理科●○

（領域ごと）

①物質　　概ね良好な結果であった

②エネルギー　　概ね良好な結果であった

③生命　　概ね良好な結果であった

④地球　　概ね良好な結果であった

（問題形式）

①選択式　　概ね良好な結果であった

②短答式　　やや課題が残る結果であった

③記述式　　やや課題が残る結果であった

（無解答率）　　概ね良好な結果であった

（その他）

・もっとも正答率の高かった設問

２（１）　流されてきた土や石を積もらせる水の働きを表す言葉を選ぶ

・もっとも正答率の低かった設問

２（３）　一度流す水の量と棒の様子との関係から、大雨が降って流れる水の量が増えたときの地面の削られ方を選び、選んだわけを書く

・もっとも無解答率の高かった設問

４（４）　食塩を熱したときの食塩の蒸発について、実験を通して導きだす結論を書く

分析

流れる水のはたらきについては、一定の理解が見られる。もののとけ方についても同様である。５年生までに実物を用いて、繰り返し実験をしたり、観察をしたりしたことについて児童の知識や感覚として身についていると考えられる。

ただ、同じ流れる水のはたらきの問題でも、より妥当な考えをつくりだすために、実験結果を基に考察し、その内容を記述する問題は正答率が低かった。また、実験結果から導き出す結論を書く問題でも無解答率が高かった。日頃の授業から、何のために実験・観察するのかという課題を明確にし、得られた結果から課題に対する考察をする授業作りが必要だと思われる。

全体を通して、解答が選択式の問題は正答率も低くなく、無解答率も低かった。しかし、記述式の問題は正答率も低く、無解答率も高かった。正しい答えを選ぶことができてもそのわけについて、自分の考えを文字にして表すことに難しさを感じる児童は多いと思われる。今後も実験・観察を通じた体験・経験だけにとどまらず、考察などを文章で表す経験をたくさん積ませる必要がある。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

全体の平均正答率は減少傾向にある。学校全体としての学力向上の取組みを更に進める必要がある。教科ごとの正答率を見ていくと国語A・B、算数A・Bとも減少傾向にある。活用を問うB問題に対する対策と共に基礎的な内容の継続的な習熟が必要である。無解答率は昨年度から比較すると増加傾向にあり、問題に最後まで取組むことの大切さを今後も伝え続けていきたい。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

今年度は学力高位層・学力低位層ともに減少傾向にあるが、エンパワー層は増加傾向にある。基礎基本を徹底した取組み、児童相互で交流しながら理解を深めていくという取組みを続けることで低位層の底上げを図ってきたが、今後もさらなる取組みの充実が必要である。また、児童相互で交流しながら理解を深める取組みは、高位層・エンパワー層のさらなる向上も見込むことができるので、今後も継続的に続け、工夫・改善を加えていく必要がある。さらに、子ども１人ひとりの学び方の違いに対応できる授業づくりも進めていきたい。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

本校児童の実態を常に把握し、今回の学力・学習状況調査の結果も踏まえ、学力向上に取り組んでいく。これまで本校が積み上げてきた取組みに加え、今回の学力・学習状況調査の分析結果にも対応できるよう取組みを進めていく。

・校内で学力研究授業を年３回実施し、教職員の授業力向上に努める。また、夏季の学力研修やまめちっち研修という短時間の研修を数多く実施することで教職員の研鑽を図る。
・年度当初と10月頃、「家庭学習・生活習慣の手引き」を発行し、児童に家庭学習を定着させ、よりよい生活習慣を身につけさせると共に、家庭への啓発を図る。
・学習規律の徹底と落ち着いた学習環境づくりを学校全体で構築する。（チャイム着席の徹底、学習用具の点検、話す・聴く姿勢など）
・習熟度別授業や分割授業などを柔軟に取り入れ、個に応じた指導体制を工夫する。
・授業の流れを示すサインポストを全クラス配布し、授業の流れを児童に明確に示す。
・「声のボリューム」・「話し方名人」、「聞き方名人」という「話す・聞く・話し合う」に関わる一定のルールを全学年に統一して示すことで、安心して伝え合う・聴き合う集団づくりに活かす。
・給食時間の放送で各学年の取組みを発信する「ならっ子タイム」を実施し、各クラスでもスピーチの機会を確保することで児童の表現力・発信力を養う。
・朝の読書タイムを週１回程度実施し、読書の機会を確保する。また、地域の読み聞かせボランティアの方に読み聞かせに来ていただくことで本への興味関心を高める。図書館支援員が児童の読書意欲が高まるような図書授業の支援や図書室の環境整備を行う。
・国語教材を利用して、児童の語彙力を高める。語彙力を高めることに適した教材をピックアップし、表現豊かな話しことば・書き言葉の実践につなげる。実践結果は学力保障部会で検証し、有効な指導方法を追及する。
・学習サポーターなど学習を支援する者の配置は、各学年・各クラスの児童の学習状況に応じて適切に時間割を組み、児童が安心して学べるよう有効活用していく。

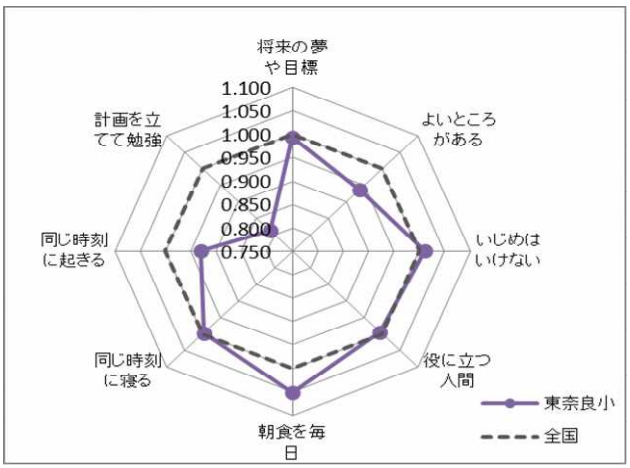
（今年度の全国学力・学習状況調査から）

＜国語＞基礎的な漢字の学習も生活場面に根ざしたイメージ化しやすい習熟を行う必要がある。理由を明確にして、自分の考えをまとめて書くという部分では、理科や社会科との関連など教科を超えた横断的な力がつくよう授業改善を行う。読書活動を充実し、多様な文章に触れ、書くことを取り入れた授業づくりを行い、読み書きへの抵抗を減らしていく。一方で、日常用いる言語に対する正確さも追求する。話し言葉、書き言葉について適切に使えるよう指導を行い、改善に導くことは言語力向上と共に、表現力・発信力の向上にもつながる。

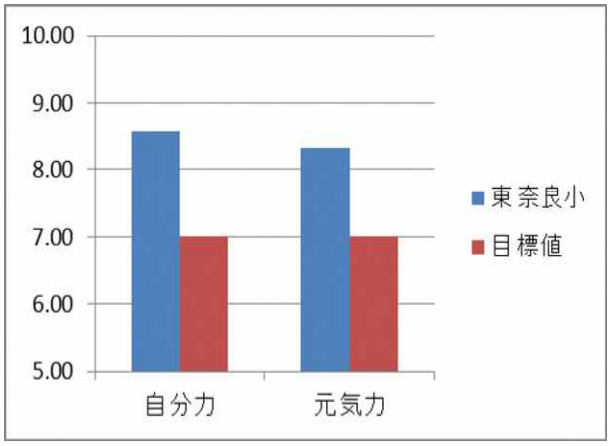
＜算数＞基礎的な計算力向上のため、様々な型の計算の復習ができるようなプリントの活用などの工夫を行う。割合への対応としては、児童がイメージしやすいよう具体物・半具体物を積極的に活用し、課題も日常生活により密着したものを取り入れるという授業改善を行う。また、計算ができることも大切にしながら、問われている意味が理解できるよう、数量の関係が理解できるように習熟の時間の確保を行う。そして、考えやわけを書くという経験を積み、自ら表現できる力も養えるよう授業改善を図っていく。

○●子どもたちに育みたい力●○

５つの力　全国平均との比較



５つの力　目標値との比較



今年度は質問紙項目が大幅に変更になっただため、５つの力をこれまでどおり算出することができませんでした。
そのため、全国平均との比較(レーダーチャート)は８項目、目標値との比較(棒グラフ)は、３項目とも実施した『自分力』と元気力』のみとなっています。

分析

将来の夢や目標を描くことはできるが、計画を立てて勉強する点においては、意識は低めである。

自分力（規範意識を持ち、自分をコントロールできる力）

総合的には目標値を上回っている。いじめにはいけない、人の役に立ちたいという気持ちをしっかりもっているが、自分によいところがあるという思いはあまり高くない。

元気力（健康・体力を保持増進できる力）

総合的には目標値を上回っている。同じ時刻に寝る、朝食を毎日食べているなど生活習慣においては、一定できている児童が多いが、同じ時刻に起きる意識は低めである。

取組み

各学年の発達段階に応じて、将来の夢や目標について考えていく取り組みを継続し、今後も、日々の学習、行事の中で達成感を感じられるよう、児童が主体となって活躍できる場を多く設け、自己肯定感を高めていくことができればと思う。

自分力（規範意識を持ち、自分をコントロールできる力）

いじめはいけないという気持ちは日常的に、また、人権・平和学習を行う際など、指導を続けていく。また、自己肯定感を高める経験を多く積ませ、一人ひとりの思いを大切にしていく。

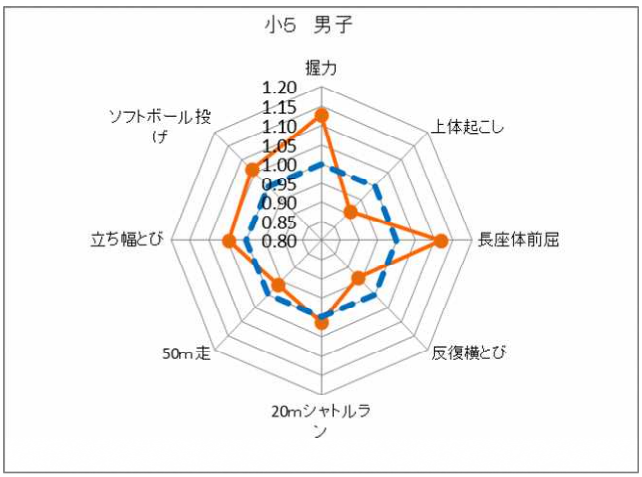
元気力（健康・体力を保持増進できる力）

今後も、生活習慣の手引き発行、保健学習の充実、給食・保健だよりなどの充実を図り、家庭への啓発を進めると共に、児童への生活習慣の指導を行う。

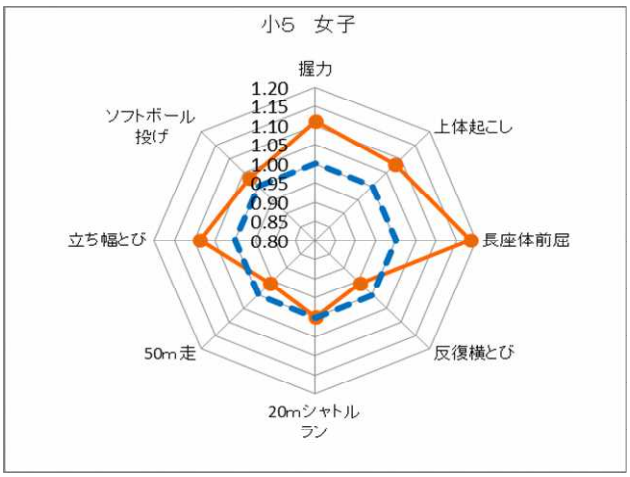
（2）全国体力・運動能力、生活習慣調査

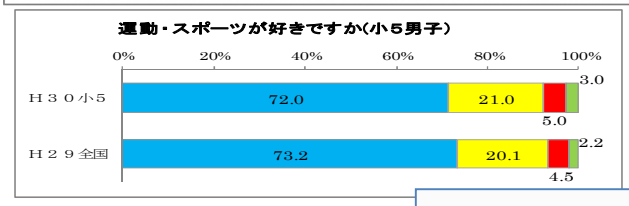
○●体力●○

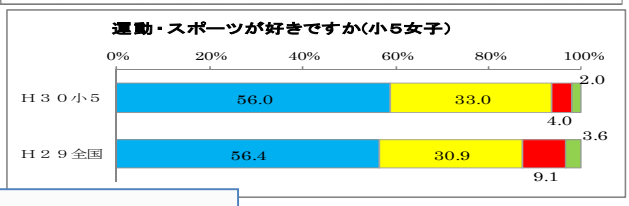
男子（小5）



女子（小5）







好き　やや好き　ややきらい　きらい

分析

今年度の結果を見ると、握力については、男女共よい結果が得られた。その理由は、低学年から継続して、鉄棒や登り棒、雲梯に取り組んできた成果が表れたと考えられる。女子に関しては、おおむね全国平均を超えることができている。これは、低位層が少ないのが要因である。

しかし、全体的に見て、男子に関しては、全国平均を下回っている項目もある。特に、上体起こしは、低い値になっているので、低学年から体幹を意識したプログラムを組んでいくべきだと感じた。

男女共に、20m シャトルランの値が去年と比べると上がっていることから、低学年からの積み上げの中で、持久力の向上を促すような取り組みをしているからだと感じた。

男子では、50m 走と反復横跳び、上体起こしの結果が全国平均を下回っている。

また、今回の児童１人ひとりの結果と、普段の体育の授業の様子を見ていく中で、運動が得意な児童と苦手な児童との二極化が進んでいるという面に気づくことができる。運動が得意な子は積極的に体育に取り組み、体力・運動能力を向上させていく反面、体育に対して苦手意識を強く持ち、なかなか達成感を得られにくい児童もいる。やはり、体育を楽しいと感じるように、授業を工夫していく必要がある。

これらのことから、発達段階に応じて「筋力・筋持久力を高める」「運動をすばやく行う力を高める」「投げる力を中心とした技能向上を図る」「体育への苦手感の克服」を進めていく必要がある。

取組み

体幹を鍛える「茨木っ子運動２」を活用する。教職員が研修を通して動きや意義を把握し、体育授業に取り入れる。また、茨木っ子運動に加え、その他の体幹を鍛える運動を教職員で共有し、体育授業の冒頭に継続的に取り入れることで筋力・筋持久力を高めていく。昨年度から、運動会の準備体操で、茨木っ子運動２を行っている。今後も継続していく。

また、体育科学習だけでなく日常的に運動ができるよう取り組む。全校児童が休み時間に運動場でなわとびを跳ぶ「なわとびタイム」、意欲的にマラソンに取り組むことができるよう「マラソンカードの配布」、寒い時期にも積極的に外で遊べるよう休み時間に学校全体で遊ぶ「みんなみんな遊び」などの取組みを継続させ、児童の実態を見て、新たな取組みも発信できるよう工夫を加えていく。さらに、２年前から、マラソン記録会を行っており、持久力の向上、基礎体力の向上につながっていけばと考えている。

体育の授業改善も図る。教具も有効に活用し、場の工夫も行う。例えばラダーや投運動を運動場体育の時には積極的に取り入れることで敏捷性の向上を期待することができる。また、児童の発達段階に応じた系統性のある指導カリキュラムを作成することで、例えば「投げる」という１つの動きも低学年から積み上げることができる。その際、手だけでなく全身を使って投げる方法を指導するなど、正しい動きの習得を大切にする。さらに、体育の校内研修を充実させ、授業力の向上につなげていきたい。そして、体育を楽しいと感じる子が増えるようにしていきたい。そのような積み重ねの中で「できた」「やれた」といった達成感を感じ、意欲の高まりを図っていく。

以上のような実践を通して、体育指導の東奈良スタンダードを確立し、児童の体力向上に努めたい。